

令和6年度（2024年度）事業報告

鮎川 正（記）

はじめに・・・背景とねらい～幼保連携型への移行を迎えて

震災で明けた2024年、園でも様々な機会をとらえて義援金を募り、職員個々でもボランティア等ささやかながら支援を続ける一方、0歳児の受け入れにも対応する幼保連携の建築基準を満たす改修工事を経て、R6年4月より幼保連携型の認定子ども園として運営を始めることになりました。背景には、両親とも就労する家庭が増え、それに伴い1号の減少と2,3号の保育ニーズ



幼保連携の新看板はR6年度いしかわ広告景観賞を受賞！

が顕著となっていること、また無償化の影響もあり教育・保育における自らの考えのもと園を選ぶ傾向が就労家庭でも強くなっており転園児も増えています。様々な面で、教育・保育への理解と共有が求められる時代と言えそうです。

0歳児（月齢9か月以降）の保育は未知の領域であり、またぐみ棟を0歳、1歳の生活拠点とし、2歳児を本園生活に移すことも初めての試みです。そこで重点課題として、第一に0歳児の安心・安定できる保育環境の整備、乳児保育の実践、研鑽、0歳児と1歳児でのぐみ棟での生活基盤の確立を掲げました。さらに、3歳以上児の学級編成の前段階クラス（2歳児）が本園側に生まれる、という新たな未満児保育への対応も課題です。本園の中で2歳児にとっての安心・安定できる環境をどのように確保し、3歳以上児クラスの活動へどのようにつなげていくか？未満児のぐみ、どんぐり時代に何を体験し3歳以上児の生活へと繋げていくか？0歳からの木の花流の未満児保育の道筋をしっかりと職員で共有していきたい、と思います。

同時に3歳以上児クラスにとっては幼稚園として取り組んできた様々な保育の日常生活、縦割り保育、保護者参画の行事の在りよう、特に午後からの生活（預かり保育）なども木の花としての保育理念のコアな要素を残しつつ見直しを図っていくことが求められています。安全面・養護面の側面もしっかり押さえた上での教育・保育活動の中身、方向性にブレが出ないように対応することを重点課題の2番目としたい、と思います。

また幼保連携になってもこれまで通りの木の花のインクルーシブな在りよう（真価）が改めて問われてきます。若いスタッフが増える中、原点に立ち返り木の花版インクルーシブのコンセプト、一人一人が安心して園生活の中で自己発揮し、その響き合いの中から創造的な世界を楽しむような保育を未満児にも視野を拡げ、2,3号の保護者も幅広く参加でき、健常児の親にも繋がっていける体制を推し進めていくことが、昨年度から引き続き、第3の重点課題です。

さらに幼保連携への移行を踏まえて新たな人材も増え、園のスタッフ体制として世代交替の転換時期とも重なっています。幼児教育施設と同時に福祉施設としても成り立つ子ども園としての園運営のスタッフ体制の整備、ベテランから中堅、若手への世代交替、木の花保育の継承、これからの時代状況を見据えた子ども園としての教育・保育の体制づくりがこれまた昨年度を引き続き、4番目の重点となります。

そして来年度は創立120周年です。歴史的な節目の年を機に改めて木の花の保育とは何か？様々な企画をきっかけにスタッフのチーム連携で、またス

タッフ全体で、また保護者や卒園生等とも連携しながら、改めて振り返りの場を設け、このような協働的な取り組みを経て、これまでの園の歩み、今の立ち位置、そして新たな幼保連携型認定子ども園としてのこれからのスタンスを、スタッフそして保護者とも共有し、地域や社会へと発信できる機会に活かしていけるような取り組みを重点課題の5点目といたします。

以上のような課題の狙いに基づき、令和6年度の重点課題に視点をフォーカスした園内スタッフによる振り返り

（注1 R6年度職員自己評価話し合い結果）を要約して報告致します。



夕涼み会の先生のお店「トントン相撲」、人間バージョン。

こういうことへの情熱は木の花あるあるです…（笑）

令和6年度事業計画の重点

1. 0歳からの育ちを見据えた木の花版未満児保育の見直し
2. 幼保連携型としての園生活、子育て支援（在園、未就園）の見直し
3. 未満児からのインクルーシブ保育の見直しと保護者支援の再検討
4. 協働的かつ業務分掌的なスタッフ体制の整備、再編成
5. 120周年を見据えた取り組み

1. 0歳からの育ちを見据えた木の花版未満児保育の見直し

R6 主な実践項目・・・

<1>0歳児からの安心・安定できる保育実践、保育環境の整備

- ・生活（食事・昼寝）、遊び（動的、静的、月齢など）での空間（1階、2階）の使い分け
- ・ぐみ棟空間の環境構成の見直し（ぐみ棟の1階と2階の家具等に空間変更、3階ホール、階段踊り場等）
- ・ぐみ棟の各保育室のモノの質と量、その配置の見直し
- ・0, 1歳児の安心できる庭での「ぐみ畑」の設定
- ・1, 2歳児との交流 ・年長、年中児（行事の取り組み過程で）、年少児（お集まりなど）との交流
- ・未満児研修（0歳児・1歳児・2歳児～土曜園内研修と平日ぐみ研修の実践）
- ・安全研修の実施（看護師資格者や保育園経験者による講師指導）

<2>本園を拠点にした2歳児保育の実践

- ・2歳児の安心・安定を生む保育室の環境構成の工夫
- ・保育実践、柔軟な行事参加（ちょこっと出番）
- ・2歳児の保育認定教育認定、それぞれの午後からの生活スタイルの運用
- ・2歳児と年少児とのシャッフルグループでの活動機会の設定
- ・以上児クラスとの柔軟な交流機会（見る、触れ合う）の設定

<3>未満児の保育課程の見直しと教育課程との連携、その発信

- ・「ぐみぐみ暮らし」（園案内冊子）の変更 ・どんぐりポートの設置
- ・どんぐり便りの週刊発行化（見える化）
- ・石川大会での2歳児保育における親との対話的な育ちの「見える化」発表
- ・2歳児（&年少）の平日の連続的ビデオトークの実践



お部屋で0歳児も雪体験…。

<1>0歳児からの安心・安定できる保育実践、保育環境の整備

子ども園移行5年間に培ってきた1, 2歳の未満児保育を経て、いよいよ0歳児保育へと歩みを進めることとなりました。9か月からの受け入れということもあり1歳児との合同保育の中で、より自己発揮する中で心身の発達が促されたように実感できます。日々やりたい気持ちが旺盛になり、何事も試そうとし、初語が出始め、表情が豊かになり、大人の話聞いて状況をみて行動に移している…そんな成長を日々感じている、とぐみスタッフは言います。心身の発達が目に見えて伸びることを目の当たりにする感動や喜びを与えてくれる存在でもあり、そうした刺激の一因に1歳児の存在の大きさも十分に寄与していると思われます。その1歳児ぐみちゃん、生活面での1階と2階での空間の使い分け（食事・昼寝）であったり、月齢の差異で遊び空間を1, 2階で分けたり、より分散することで、それぞれの子が集中して遊び込める環境を作り、結果、大人への依存が少なく、自立して遊び込んでいる姿を多く見出すことができるよ



1, 2階で遊び内容で分散してゆったりと…。

身の回りのモノも遊びに使って…



生活面でもトイレに行って自分で排泄しようとする姿や午睡、食事など何事も自分でやろうとする意欲が溢れている、とスタッフたちは口を揃えます。ぐみ棟を安心基地にして園庭や本園、そして園外へと行動の幅を拡げ様々な環境からの刺激を自ら吸収してやってみようという意欲と自信、心身諸機能の成長を実感させます。

このような0歳からの未満児保育の保育実践を裏で支えているのが、未満児の発達理解を深める園内研修です。ぐみの保育のビデオ研修を全スタッフ（&サポーター）で土曜日に開催し平日のお昼寝時間帯を狙ってぐみスタッフ版で年間を通じて実践してきました。表面的に見えている子どもの姿をより掘り下げて内面の想いを読み取ったり、何気ない保育者の言動を再考することもあり、因果関係を楽しめる、ちょっと難しいことに挑戦したくなる心情や、自分と相手の2項関

係からモノを介した3項関係への変化など発達の節目のポイントをスタッフ全体で押さえて、個々の子どもの育ちと共に、遊びの中で心身の発達を促す環境やモノの配置などの見直しにもつなげ、本園スタッフとも連携を図ってきました。

また他の保育園経験の長いスタッフ、看護師資格をもつスタッフが加わることで私たちに不足している保健衛生や養護のスキル、知識を忌憚なく伝えてもらい、また彼女たちを講師にした安全研修を行うなど、より安全な衛生的な環境づくりのスキルや意識づけを高めることができました。盲目的な「安全」ありき、ではなく、子どもにとってどうか？という視点での対話的なアドバイスが非常にありがたく、乳児監査での指摘事項も、額面通りではなく、より子どもにとってどうなのか？という視点での対応の重要性を改めて実感できました。

1階は食事、2階で昼寝…



やってみようとする意欲は以上児さんにも負けないぐみちゃんたち…

< 2 > 本園を拠点にしたどんぐり組の保育実践

2歳児の生活基盤を本園の保育室を拠点とすることで多様な2歳児（3号保育認定、1号満3歳教育認定）の異なる園の生活スタイル（教育時間は共通、午後からはそれぞれ別）を如何に個別にスムーズに無理のないものとするか？は大きなポイントでした。

2歳児の安心・安定を生む保育室の環境構成は、子どもの様子を見ながら様々に変化、工夫してきたところです。大型積み木やテーブル、段ボール、マットなど様々な素材を組み合わせ、「隠れる」「見える」「休める」「小上がりに上がる」「登れる」「寝転がれる」など一人一人の安心・安定感の拠り所となるポイントを形を変えて創り出す一方、行事の取り組み等がすぐ感じられる環境を活かして、様々な取り組みを「見る」、「おすそ分け」をもらうなど

本園で初めての2歳児保育室。小上がりスペースや…



隠れるスペース等々、子どもの姿、時期を見て環境を随時変更…

教育時間帯の保育実践において、以上児の姿、活動を2歳児が見ることの幅が大きく広がった、と思えます。

拠点（保育室）を安心基地にして、外へ出ていく自信が垣間見え、本園の以上児の遊びを間近に見て、やってみようとチャレンジする姿や自由奔放な行動が本園にも非常にいい影響を与えています。(年少にも自然に混ざっている様子も・・・)。同時にどんぐりという仲間意識が強いのも特徴的です。お昼ご飯が早いこともあり、昼のホールを独占して遊んでいる中であったり、どんぐりの子らがお昼寝に子ども自身が荷物持って、友だちと行き来している中でもそうした仲間意識が培われているのかもしれない。また行事の取り組みを直接的に肌身で感じることができている環境だからこそ、運動会、木の花祭り、クリスマス会等の行事もいわゆる「練習」の類なしで、そのまま自分たちも出て当然という意識を持って参加することも自然にできたように思えます。



お家の人が二階席から見守り中の発表会…



真っ先に昼食を終えホールを独占。午前の活動で残った環境をそのままいただきま〜す！

また2歳児の活動もクラス単独ではなく、多様な異年齢の関りを考慮し、これまでも試行錯誤してきた近接学年との交流の運用（1歳+2歳、2歳+3歳など）や年少児とのシャッフルのグループでの多様な空間での遊び（ぐみ棟+庭+ホール+年少の部屋）、あるいは以上児3学年の縦割り活動への個々に自由に好きなグループへの参加など、スタッフ間の連携のうえ、交流実践に留意してきました。

そして教育時間帯はどんぐり組全員で本園で過ごしつつ、お昼ご飯を終えて午後からの保育時間は、個々に食事を終えてから昼寝のためにぐみ棟へ行く形式から、慣れてきてからは、本園でひと遊びしてから昼寝に行くようなスタイルにしてみました。お昼寝のための移動の際に見せる、子どもたちがリュックをもって「行ってきます！」と、ぐみ棟へ移動する姿に2歳児の自立を感じさせます。同時に2歳児（保育認定）と満3歳児（教育認定）、それぞれの午後からの生活スタイルも考慮し、同じように2歳児でも寝ない子やおやつを取らない子にも無理強いはせず（声かけはするも）、年少児等の本園（園庭）での遊びに混ざるような選択的な環境を作ってきました。

一人一人が個々に自分に合う生活スタイルを出せるプラス面と同時に個別に午睡の必要性などとの兼ね合いなども悩ましいところですが、3学期半ば以降は年少進級に向けた生活スタイル（昼寝なし、午後のお集り、おやつを本園保育室で…）への移行も徐々に試行中です。



お昼寝は荷物を担いでぐみ棟へ…

<3>未満児の保育課程の見直しと教育課程との連携、その発信

R6（2024）年度は東海北陸地区の幼稚園協会の教育研究石川大会があり、木の花の2歳児クラス担任が話題提供者に抜擢され、どんぐり組を事例に親と対話的に見出す子どもの育ちの「見える化」の発表に取り組むこととなりました。その発表報告作りの過程で、発表報告をスタッフ対象にプレゼンし、質疑応答や議論を重ねる中で、スタッフの中での2歳児の理解の促進と共に親と子どもの育ちの共有の在りようも大きなテーマとなりました。その流れから2学期後半から2歳児（&年少を交えた回も）の平日の連続的ビデオトークの実践へと展開していきました。土曜日のビデオトークとは別に気軽に参加できるスタイルを志向し、またどんぐり保護者と年少保護者とつなげる契機になれば、という担任の想いに叶うような年少保護者たちの積極的な参加もあり、年少、2歳児の異学年の親同士のつな



おままごとコーナーに設置した遊べる開き扉にどんぐりだよりを掲示して…

がりも深くなったように思いますし、お迎えついでにという「気軽な」スタイルもビデオトークの新たな方向性も垣間見えるような気がしています。

なお、日々のクラスとしての遊び、活動をどんぐり組ではホワイトボードに記載して玄関先に掲示、月のクラス便りを週刊化し（代わりに連絡帳を廃止）、クラス活動、遊びや生活の様子をリアルタイムで発信。掲示して貼る遊べる扉があることで子どもも見ている姿をよく目にします。保護者（どんぐりに限らず異学年の親）にどこまで届いているか？その見極めが難しいところです。またこのような発信のもとになる、ぐみ、どんぐりの個々の育ちの記録、職員間の共有や0、1歳児の月案の保育計画の在りよう、0歳児入園から年少進級までの育ちの道すじ（保育課程）を木の花幼稚園の保育計画のスタンダード版として整理、発信をすること、ぐみからどんぐり、さらに3歳以上児の教育課程にどのようにつながっているか、分かりやすく見える化していくことなどが大きな課題として残されています。

2. 幼保連携としての園生活、子育て支援（在園、未就園）の見直し

R6 主な実践項目・・・

<1> 園生活、行事、保護者参画企画等の見直しと再編

① 園生活の見直し

- ・おやつ時間帯の見直し ・お弁当箱から園で用意した陶器のお皿への給食スタイルの変化
- ・お列散歩等の柔軟な運用 ・預かり保育、延長預かり等での保育計画の見直しと取り組み
- ・預かり以降の時間帯での日替わり縦割り活動の実践
- ・長時間預かりの子の有志による木の花祭りのお店屋さんの出店 ・冬の雪だるま祭りの夕方開催
- ・小学生サークル等の学童と幼児との交流

② 保護者参画企画の見直し

- ・全学年親子レクや父レク、親子レクの異学年交流の継続
- ・サークル活動の多様な展開（保育コラボ、合同サークルコラボ、各種行事での参加等）
- ・ちょこっと感覚ボランティアの呼びかけ（ランチの日の配膳やクラス活動、お散歩等）
- ・新規田んぼでの活動（田植え・稲刈り）
- ・保護者会活動の土曜集りのフォロー ・母ほろ酔いの職員参加
- ・おやじの会の独自取り組みのサポート

<2> 未就園の子育て支援並びに発信の見直し

- ・わいわい倶楽部の活動日の曜日固定と緩やかな参加の継続
- ・在園児向けのお便り、オクレンジャー、掲示板など多様な見える化
- ・FB、インスタなどの推進 ・子どものつぶやき発信



<1> 園生活、行事、保護者参画企画等の見直しと再編

クリスマス時期にはちくちく縫物を飾りにお人形遊びコーナーの設置

① 園生活の見直し

幼保連携となっても以上児保育の中身は変わらず、自由遊びでは遊具庫内におままごと、階段踊り場にドールハウス、絵本コーナーにちくちく縫物を飾って遊べるコーナーを創設するなど空間活用を一層進化させる一方、**日常生活の流れを再考**しました。一つは各学年の教育活動に入る前に朝の自由遊び後の節目としておやつタイムを取り入れ、ワンクッション入れて教育活動に繋げることです。ここ数年早朝保育の子が増え、また朝の登園前の朝食自体が不規則であったりするような姿も散見され、現代の家庭環境を考えると、午前中の合間に一度おやつ（軽食）を取り入れることが必要ではないか？という職員間の議



おやつ配りは子どもがするときも…



論の元、午前中の一区切りとし、おやつを取り方もホールや部屋などバリエーションをつけることで子どもたちにもいい刺激になり、登園を嫌がる子がおやつ(その雰囲気)でいこうという気になったこともある、という話も聞きます。おやつ

の時間にだんだん並ぶのが上手になり、手洗いが素早く、自分からちゃんとやっている姿が伺えます。また午前中の活動時間が長い分、昼食時間が遅めになりやすい以上児の日常を踏まえ、午後の時間帯では16時～16時半頃におやつ時間帯を設定し、延長保育への切り替えのタイミングとして、おやつを提供するようにしました。こうした日常生活の流れの再考に加えて給食では昼食用の容器を園で用意することになりました。陶器のお皿など特に年少さんで当初、落として割っ

てしまうケースが続きましたが、遊びとしてお皿を扱う活動なども取り入れ、徐々に扱い方も慣れてきました。おやつ作りに皿洗いなど調理員の負担も増えましたが、3人から4人体制で今年度から対応し(離乳食作りもあるため)、プラスチック容器の手軽さではないモノで温かい給食を取れることは、子どもたちにとってはより良い食環境への進化だと思われます。

またどんぐり(2歳児)が日常的にいる中、さらにぐみ(1歳児)も自由遊び等においても庭や時には本園にも来て遊ぶこともあるので、ブランコなど動態遊具、遊具庫の扱い、大工道具等の危険なモノを扱う遊び、活動などの安全面での、スタッフ間の連携、共有に留意してきました(朝の自由遊び中はブランコを控え、午後から解禁など)。一方で以上見たちはどんぐりの子ら(2歳児)が本園にいて、ちっちゃい子の存在を日常的に体感し、それが逆にいい意味で小さい子への配慮につながっている姿、動き方にも伺えます。

二つには多様な人間関係作りをテーマに3学年編成(年長+年中と年少)の縦割り活動を基本に2学期から教育時間帯での活動を月に1度継続的に行っていました。グループ担当の先生は決めつつも遊び・活動のテーマは自由として、園内の様々な空間で縦割り活動をしてきましたが、縦割りは人間関係の広がり

に大きく寄与するその意義はわかりつつも、教育時間帯だけではその時間を捻出するのが難しく、11月後半から預かり時間帯に縦割りグループで遊ぶ日を1日1グループ限定で連続的に実践しました。預かり時間帯の固定した人間関係を崩すきっかけになるとともに、縦割りそのものを期待する子どもたちの想いが、縦割り以外の子らにも波及しているのが伺え、午後以降の時間帯が伸びる中で、縦割りがあることでおのこりの楽しみが一つ増えた感じを受ける、とスタッフは言います。長時間保育の子どもたちの意識の中に、マンネリを超えた

い思いが芽生えているのを痛感します。また縦割りを通じて預かりの時間帯での園空間の活用法の開拓につながったこと(ぐみ棟や屋上など)、縦割り活動の継続があることで異学年の馴染み方が深くなり、縦割りの子どもたち同士で集まる力がついてきたり(メンバーシップの芽生え)、異年齢同士の関わりが増え、意外な子同士の組み合わせが日常の中でも見られるようになりました。また教育時間の3学年の縦割り活動に前述の通りどんぐりの2歳児が加わることもありました。固定メンバーとして入れるのではない、自由な入り方で、それぞれの空間での遊びの気に入ったところに加わったり、飽いたら別のところに行き来するなど、2歳児ならではの自由奔放な姿が垣間見れました。

上記の預かりでの縦割りにも関係するのが、午後の預かり時間帯の保育実践の見直しを図る預かり専任スタッフの初配置です。正規スタッフで初めて預かり保育の「司令塔」を立て、午後の自由遊びから続く、預かり保育時間帯の指導計画の再考を行いました。お列散歩を継続する中で、違うコースに入るなどのお列シャッフルの提起や木の花祭りウィークにおいて、預かり保育の

縦割りでぐみ棟アプローチも遊び場に…



木の花祭り初の預かりの子らのお店…



特に長時間になる子らから有志を募ってお店屋さんの活動を取り入れる「もりのおかしやさん」、大雪後に夕方からの「雪だるま祭り」を開催するなど保育時間帯の中での新たな「非日常」の取り組みが試みられました。夕方から夜の活動につながる森のお菓子屋さんには、全員強制ではない有志という点がミソで、人間関係の多様化、意外な子らのお番や役割などの自己発揮する機会になりました。暗くなっている時間帯でのお店屋さんワクワク感を感じる機会でもあり、子ども達自身がマンネリになる中、非日常的な取り組みをやりたい子らで集中して夕方に取り組み、共通の目的を志向する仲間意識が生まれました。夜を感じる、夜を楽しむことに子どもたち自身、期待感を持って取り組んでいたそうです。また夜のお店は、ぐみの子らがお店屋さん（バザー）を直接体験できる機会になり、親子で体験できることでぐみの保護者にも木の花祭りを体験できるいい機会になりました。



保護者、地域への案内は子どもたちも…

また預かり保育時間にある小学生サークルは今年度はさらに1,2年生の枠で継続。幅広い異年齢交流に繋がる小学生サークルの活動も園としてもサポートしつつ、午後からの生活の異学年交流のきっかけに活かしてきました。小学生の作り出す遊びの見学会（河原でのロケット、遊具庫のお化け屋敷、ホールでの小学生作の映画上映など）、これまでにない小学生2年生から幼児までの年齢幅のある異年齢交流も持つことができました。小学生がいることで学童の遊び、姿への憧れが生じる、また園児との関わりにも「さすが小学生」と思わせる、と預かり専任スタッフは言います。幅広い異年齢交流の機会を与えてくれていること、アワーシップのスタッフ保護者の柔軟な対応にも感謝したい、と思います。



アワーシップ企画での在園児との交流の一つ。小学生作の映画上映会。

おのこり（預かり保育）の保育の再考がここ数年来の大きな課題ですが、預かり専任の担当を用意し、ぐみ及び2歳児の保育部門とのスタッフ間の連携を図りながら、教育プログラムとの関連性を預かり保育計画に取り込みつつ、より系統的計画的に預かり保育の中身を捉え直していく、その足掛かりになった一年であったと思います。とはいえ午後後半は未満児と以上児との混合の中で、遊び、活動の内容や空間の取り方、人の配置、把握と記録などマネジメントがより高度になってきます。その点は今後の課題です。

年中さんの草木染めの活動は野良野良倶楽部のお母さんを講師に…

① 保護者参画企画の見直し

サークル活動が多種多様な活動を展開し、保護者発案のサークルも発足したり、保護者主導の活動が展開される中で保育と絡めた活動もあり（草木染めやフラダンス、誕生会の出し物、絵本の劇場版など）、子どもたちの教育活動や多様な引き出しにも繋がっています。一方で行事・イベントとして在園の保護者参画の在り方は再考の時期にきています。昨年度に引き続き、創立記念日をきっかけにした全学年親子レクを継続実施し、異学年の親同士の交流を企画。保護者会総会と兼ねる異学年保護者同士の交流を行いました。父レクや親子レクも学年単独とさらに異学年同士の交流なども企図しつつ、強制ではない緩やかさで気楽に参加しやすい雰囲気を作ってはきましたが、参加家族の固定化など



ビデオトーク平日版は定期的に…



とは否めず、特に未満児同士の親のつながり、保護者参画の在り方も、特にどんぐり組が独立したことで大きな課題として浮き上がりました（これまではプチの親が媒体となってくれていました）。ぐみのビデオトーク後のぐみ棟の大掃除をしていただいた際、保育をこちらでみる一方で未満児同士の親同士のつながりをもつ場を設けたり、前章でも触れたどんぐり組の連続ビデオトークを持つ中で、年少児の保護者との合同ビデオトークの余韻の中での雑談等を通じ

たつながりの芽生えなど、足を運びやすいきっかけを作る努力を重ねてきました。しかし、参加者はきょうだいのいる保護者が多く、開催時間の課題もありますが、ぐみ、どんぐりの未満児の保護者はどうしても一步引いてしまう感
 は否めません。今後どのように無理なく、足を運びたくなるような仕掛けを工夫していくか？ **今の親世代の感覚に
 照らして、未満児をお子さんに持つ若手スタッフの意見、アイデアなども参考に既存の形態から再考していきたい
 ところです。特に2, 3号の保護者にも参画しやすいような夕方から夜、土曜日を活用した各イベントなど、保護者会
 (おやじの会) 活動とも連携しながら、緩やかな参加から深い参画まで幅広いコミットの在りようを再検討すること
 も大きな課題です。**

<2> 未就園の子育て支援並びに保護者の対応と発信の見直し

未就園に関しては、わいわい倶楽部、ワイワイ会、プチプチ会、赤ちゃんサークル
 など既存の形態からなかなか新たな装いにリメイクには至っていません。料金設定や
 曜日の固定化、おやつも一緒に食べられるなど利用のしやすさを出したものの年間登
 録者が限られています。0、1、2 歳児のより幅広い層の受け皿になるようなものとし
 て、こちらも若手職員等の意見、アイデアなども取り入れながら再検討していき
 たい、と思います。

発信に関しては、FB、インスタなど SNS を活用したツールは大きな発信力をもつよ
 うで、フリーが園内、園庭で日常の遊び、活動、行事の取り組みなど伝えてきました。
 一方でクラス便りなども紙版で掲示して異学年の保護者や地域の方などにも見えるよ
 うに努めてきました。また子どもの日常のつぶやきを職員 LINE で共有しつつ、園便り
 で保護者向けにも定期的に発行。教職員には関わりの少ない子の様子が知るきっかけ
 になったり、子どものことを話し合うきっかけにもなり、子ども同士のやりとりや会
 話を聞こうとする意識が職員間で強くなった一方、保護者にはどの程度、読み込まれ
 ているか？はまだ未知数です。またオクレンジャーなどのアプリなどの配信も増えて、
 画像の見やすさなど利便性も増してはいるものの、担任の想い、意図が届いているの



インスタ、FB で日常の遊び、活動を発信

か？読み手に届く発信につながっているのか？は今後も保護者との対話を通じて、よりよい発信につなげていければ、
 と思います。

3. インクルーシブ保育、園環境の見直しと保護者対応

<1> 木の花版インクルーシブ保育、園環境の見直し

R6 主な実践項目・・・

- ・インクルーシブ保育研修の年間を通じた実践（年間）～彼らの姿、エピソードのスタッフ全体の
 収集、及びそこからの読み解きとスタッフの共有、ノート（教育支援計画）の作成へ
- ・幅広い柔軟な空間（ぐみ棟含む）の使い方、モノの配置
- ・フリーがクラス補助に保育室ではない空間でのフォローに入る、という人の配置
- ・育ちのノートの作成に係る「肝」の見える化への対話的な整理（各担任と預かり専任）
- ・外部研究者・専門家、及び他園園長、職員の園見学とインクルーシブ保育への交流懇談など

<2> 保護者対応

- ・開かれたキラキラ会の柔軟な運用（午後の預かり時間帯でのキラキラ会の開催）。
- ・育ちのノートの共有を面談等の早い時期からの実践。➡育ちのノートを見せながらの面談の実践
- ・保護者会のおしゃべりウィークでのインクルーシブ保育版での親同士の相互理解の場のアシスト

<1> 木の花版インクルーシブ保育、園環境の見直し

今の子どもたちの姿の内面的な心情を映像から読み解き、木の花のインクルーシブな生活、そして支えとなっている園環境としてひと・モノ・空間を見直し実践に繋げていく、特別支援研修を今年度も継続して行ってきました。年度当初にまず園に在籍する配慮が必要な子及び気になる子も視野に彼らの在りようを、二学期当初にそれぞれの方向目標の共有をスタッフ全体で行い、二学期末にはスタッフ間で集約したエピソードから子どもの育ちの力、課題を共有。三学期当初にはビデオ研修を通じて、子どもの学び（力）とその押さえどころは何か？を確認し、その力を発揮するための合理的配慮は何か？を検証してきました。



全スタッフの集めたエピソード、これまでの記録など集約、整理、時に講師を招いて事例検討の園内研修…

エピソードをいろいろなスタッフの視点から聞き、共有することで、その子の姿を多面的に捉え方向目標など練り直すことが出来たり、エピソードやビデオの共有を通じ、その子について話し合うことで、一歩踏み込んだ考えをスタッフが持ったり、あるいは見方が変わったり、彼らの目の付けどころをより深く考えるようになったり、**幅広く気になる子どもたちへの視野を広げ、より深く読み込む姿勢が広く職員に共有**されました。また偶然にも文科省の科研費を活用した研究者がインクルーシブをテーマに研究対象として木の花にも来園したり、金沢市の統合保育研修として市内保育園の園長先生たちが2度ほど来園、見学するケースが今年度はあり、そうした機会をとらえて、外の視点からとらえた木の花の保育の在りようを職員間でも改めて見直す契機にもなりました。「特別支援」の考え方とのギャップに気づかされたり、配慮が必要な子どもたちの姿が目立たない、という他園の園長先生の所感から園のインクルーシブの環境を改めて実感したり、他園経験のスタッフからは、外れたらクラスに戻す、または彼らについていく、**という思いがなくなった、というスタッフ意識の変化も聞かれます。**

こうした園内研修での蓄積と外部の方との対話的な討議も背景に、インクルーシブな環境構成の中で彼らの育ちが随所に発揮されていることが分かります。ぐみ棟にも遊びに行く（空間の選択）、色々なモノを探して自分で興味関心のある遊びを見出す（モノの活用）、製作コーナーを作ると自分で作り始める（主体性の発揮）、人に頼るために方法を考えて実行するようになる（ひとへの対応力）、モノの活用からの行事への主体的な参加が発揮（発表会、クリスマス会等）、本物との出会いの中で彼らとその真価（力）を発揮する姿が伺えます。また、彼らの遊びの後（モノ）を使って周りの子らが遊んでいたりと、ぐみのモノを年少クラスにレンタルすることで遊びの枠が広がったり、ぐみの子らが彼らの遊びにも関心を示したり、周りの子らが彼らへの仲間意識や彼らをリスペクトしている様子やまねっこ（彼らの行為）で遊ぶ子もい



光と影、影絵も登場の発表会。多様な子らの興味関心が行事の取り組みの中でも活かされます。

れば、彼らを安心できる仲間にしてしている子もいる、とスタッフは言います。**日常生活の中での安心・安定した存在、関係性からさらに活動の中へ、行事自体を主体的に楽しむ、彼らの特性が行事そのものに彩を深める、そんな様子も見受けられ、多様な子どもたちが響き合うインクルーシブな文化が根付いている、と改めて実感できたところ**です。

また幼保連携となり金沢市の統合保育の対象園となったことで、市の幼児教育センターからの巡回指導も受けることとなりました。これまでの保育実践そのものを変える必要はないものの、外部の専門家にもインクルーシブな保育体制がとれていることを十分に見てもらいつつ、より分かりやすい子ども理解につながる個別の指導計画、教育支援計画の作成など、既存のモノを最大限活かしながら、巡回指導の専門の先生にも十分、木の花のインクルーシブの内容、育ちの力などが伝わるよう努め、相互に子どもの育ちの視点で意思疎通のできる対話的な場が持てたことも、いい意味で幼保連携に移行したことの意義であったかもしれません。

<2>保護者対応

保育と並行して「発達障がい」を含む彼らの様々な特性とその特性を包括的に活かす園生活とはどのようなものなのか?・・・というこの理解を保護者にどのように進めていくか?彼らの保護者のみならず、周囲の保護者も含めて全体としての理解を進め、ピアサポートであるキラキラ会への担任参加と幅広い保護者参画へ開かれたキラキラ会を引き続き継続してきました。担任がお家での子どもの姿を理解できたり、面談ではできないような会話が第三者がいることでより深くなったり、他の人の視点が入ることで親の理解がより深まったり、たまたま別企画と一緒に日にキラキラ会を開催したことで多様な大人の視点での会話ができたこともあり、色々な人の参加があって純粋に子育ての話ができるようになってきているようです。担任が入ることで親の意識をダイレクトに感じ取れる、ほかの親御さんの視点に触れる、また保育現場の中での子どもの姿、育ちを直接語れる場である一方、就労する母も増える中、参加人数の少なさや運営など課題も多い、と感じています。「発達障がい」というテーマではなくてもより幅広い層が子育ての悩みや喜びなど思い思いに語り合えるような場をさらに広げていくことがこれからの課題かもしれません。

4. 協働的かつ業務分掌的なスタッフ体制の整備、再編成

R6 主な実践項目・・・

<1>スタッフ間の共有と連携

- ・職員ボード（連絡ボード）、職員会議ノートの運用 ・回覧ボックスの設置
- ・サポーター等含めた研修による連携（話し合いや振り返り）・担任シャッフル（夏季保育期間）

<2>働き方改革の推進

- ・以上児担任の預かり保育担当からの除外。
- ・園からのお手紙のオンライン化（オクレンジャーの活用）、PC共有の整理（使わないデータとの峻別）
- ・ローテーション勤務の終礼確認、効率化と退勤時間の管理 ➡ 会議中でも退勤
- ・ノーコンタクトディに替わる土曜日保育の振替休日の導入。・看護休暇や特別休暇（コロナ、インフル）等の休みの取りやすい勤務体制の運用 ・リモートワークの運用（年長担任での実践）
- ・時短勤務の多様化、60歳以降の継続雇用など多様な勤務形態の整備

<3>世代交代と人材育成に向けた取り組み

- ・主任2人制による主担任会議と副担任会議の運用
- ・120周年あるある部会による異世代間交流座談会などの木の花保育の継承の場づくり ・音楽研修
- ・若手リーダー以上（処遇改善Ⅱ対象者）のテーマ別環境構成の実践と共有（ぐみ棟、どんぐり保育室の環境・自然物・縫物・食・廃材・リズム・言葉遊び・絵本・つながり遊び・伝承遊び等を各自がテーマ設定し年間実践）

<1> スタッフ間の共有と連携

幼保連携型に移行するにあたり、未満児保育（0歳から）、長時間保育、土曜日保育、預かり人数の増、ローテーション勤務など、スタッフの様々な情報の共有、負担の増大に対応していくことが大きな課題でした。そこで情報共有は職員ボード（連絡ボード）、職員会議ノートの運用、回覧ボックスの設置などで補う一方、子ども（クラス）理解に関しては夏季保育期間にぐみも含めて担任スタッフのシャッフルを行い、子どもたちにも多様な人との関りへのきっかけにすると共に、子ども、クラスの生活を体感的に理解してもらう機会にもしました。違う学年を持ってみて子どものことも理解できたり、以上児担任はぐみの生活を知ることができたり、クラスになるとこういう子なんだ、という違う発見があったり、大人によって子どもの姿に違いが見られるように感じたり、配慮の子へのかかわり方なども見習いたい、という声もあがる等々、スタッフにも子どもにも色々な刺激があったようです。



担任シャッフルは主任の差し金で園長は強制的にぐみぐみ担当に…(笑)

＜2＞働き方改革の推進

また預かり専任を置く一方、以上児クラス担任を預かり保育の体制から抜き、預かり時間帯はぐみ・どんぐり・フリーとの協働保育を専任スタッフと共に行うように変更し、以上児クラス担任が教育時間の活動に準備含めて専念できるようにしました。以上児クラスでの担任間の打ち合わせや事務時間が確保できるなど負担軽減につなげる一方、土曜保育の振り替え休日の設定など労働カレンダーを従来から大幅に見直し、個別労働カレンダーを作成、個々の異なる勤務体制のなるべく平等な年間勤務時間の設定に努めてきました。平日に休めることでリフレッシュできたり、預かりの人数次第で合間に交代で事務も出来たり、平日の振休と共に有給取得も進み、休みがとりやすくなった、コロナ・インフル等の特別休暇で気兼ねなく休める、看護休暇の枠も広がりとても助かっている、という声もスタッフから挙がってきます。スタッフの働き方に心の余裕を持たせると共に今後も子ども理解のための様々な情報共有、連携、協働歩調が取れるよう、今後もスタッフ間のコミュニケーションを密にしていきたい、と思います。

また異業種（医学分野）の専門的なスキル、知識をもつスタッフ配置により、教育と保育（医学、福祉的視野含む）との協働的な取り組みもこれからのこども園の体制として不可欠と思われまます。看護師や保育園経験のあるベテラン保育者による衛生関係の園内研修を通じて、衛生面への意識付けがより深まったり、また日常的な怪我や調子が悪い子への視診などにも看護師の存在は保育スタッフへの大きな支えになりました。乳児巡回での保健師からの指導への対応も専門職ならではの、と改めて感じたところです。さらに若手職員が結婚、産休、育休での職務中断が重なるような状況がこれからも続くこと、ベテラン職員が長く働き続けられる環境整備のため、時短勤務のバリエーションや60歳以降の働きやすい勤務体系、勤務形態の運用指針を定め柔軟な対応を学校法人としても取り入れ、より働きやすい職場環境の整備に努めてきたことも付記しておきます。



アナフィラキシー、嘔吐処理対応など机上+実地での安全研修…

プロミュージシャンの体験型音楽会も職員ワークの刺激に…

＜3＞世代交代と人材育成に向けた取り組み

また世代交代と人材育成に向けた取り組みでは、石川大会での会場運営や話題提供での研究発表などの担当もひとつきっかけにしつつ、それぞれの職員が行う園外研修の実践を園に持ち帰り、それを保育現場に還元したり、園職員に共有したり職員間の連携、協調を促しています。（注2 R6年度 木の花幼稚園職員園外研修一覧）。また次章の120周年を契機にした、120周年あるある部会による異世代間交流研修などを通じて木の花保育、園文化の理解につなげ、なぜそうなのか？をスタッフ全体で考える契機としました。また夏に行ったプロミュージシャンを招いた音楽ワークショップでの職員研修も大いに刺激があったようで、職員からも研修の発案を行いたい旨の声も若手から挙がり、今後大いに期待したいところです。学び続ける職種としての魅力、保育のやりがいなどのモチベーションもスタッフ全体で共有でき、そのうえでこれまでの木の花の保育の系譜を再度振り返る機会をこれからも設け、併せて多種多彩な園内研修等も通じて、日常の保育の中でこれからの保育の継承、世代交代を進めていければ、と思います。（注3 R6年度 木の花幼稚園園内研修一覧）

5. 120周年を見据えた取り組み（新規）

*木の花コンセプトブック（『木の花あるある事典』）に向けて

- ・これまでの「聞いてください」、「行事とは？」など既に発信を整理。
- ・保護者卒園生などからQを募る（新職員や保護者ボランティアから）。
- ・職員間でQについて討議の場を設ける。 ・今後の冊子化の具体化を検討中。

*過去の木の花保育の園保存している作品展に向けて

R6 主な実践項目・・・

- ・作品の整理、一覧表の作成・解説版のもとになるクラス便り・園だよりをまとめる。
- ・行事ごとの年間を通じた展示方法を提案、検討中。

***大人版（青年、成人）の同窓会の開催**

- ・同窓会 HP の立ち上げなどともリンクして呼びかけを図りたい等々検討中。

***「お帰りの歌」の新規作成（子ども園バージョン）**

- ・小学生サークルでも一度試験試作。・園歌はできないか？検討中。



過去の協同製作物が多数保存…



来年度に木の花は創立 120 周年を迎えます。スタッフの中でベテランを中心に 120 周年の特別部会を作り、そこで提起された 4 テーマ（上記の内容）を提案。記念冊子となるか？まだ全体像は不鮮明ながら、木の花の園文化を理解する冊子づくり、園保管中の過去の作品類の挙展示、作品類を振り返りつつの青年・成人層の同窓生向けの拡大版同窓会（ベテラン保育者たちの教え子たち向け）の開催、そして既存の「お帰りの歌」から子ども園に見合う、午後のお集りの時に歌う歌への改編（リメイク）、の 4 点です。その特別部会スタッフのそれぞれが 4 つの部会のリーダーとなり、検討したいテーマとしての取り組みに、正規フルの各スタッフが希望したところに加わり、各担当チームを結成。チームごとに自主的に今年度、取り組みが進められてきました（定期的に活動状況を職員会議等で共有しつつ・・・）。保護者ボランティアも募り（登録者延べ 15 名）、今後は**保護者ともシェアできることはシェアし、この取り組みを機会に木の花の保育理解を深めると共に、保護者も共に参画できる園の在り方を来年度も引き続き模索したい**と思います。

結びに代えて・・・木の花版「雪だるま祭り」開催！

未来への不透明感を増す現代、地球温暖化は海水面温度の上昇で記録的な大雪を今年の冬にも全国を席捲！気象災害とも思えるような地域もあります。そんな中で、極めてアナログ的ながら、園前の道路、駐車場、ご近所の周りの雪、世間でお困りもの雪をせっせと除雪し、園庭に運び入れて、庭の雪遊び環境作りに精を出すと、預かり専任から冬の「雪だるま祭り」開催の提案。大雪を逆手に取った駐車場や道路、ご近所の雪山を取ってきて園庭に思い思いの雪だるまを作る新企画は、白峰版を街中に持ってきたようなライトアップ作戦はご近所への案内ポスター、チラシの作成も子どもたちと行うことで、ご近所からも評判がよく、在園親子のみならず地域の方も立ち寄る、地域コミュニティの場になりました。（午後 3 時から門扉を明けて道路や駐車場、ご近所の前に積まれた雪を親子で運び入れつつ、思い思いの雪だるま作りに励み、中にはエルマーの「りゅう」のようなかまくら付きの造形物もきょうだいの小学生組が奮闘し



て作製)。これも木の花流の地域貢献…。

夜の帳が降りる頃、色々な雪だるまにろうそくの火を灯している姿は、またその様子をスマホで取り合う姿は、アナログとデジタルの木の花的な融合かとも感じつつ、大雪で苦しむ能登へのエールになればという想いと共に、120 周年に向け、幼保連携として地域への理解と支援、そして今の子育て世帯とも様々な面で協働できる園として、子どもたちの遊びの王国をより豊かに実りある子ども園となるよう、新たな発火点になれば、と願うところです。



能登まで届け！木の花の祈りの灯、120 本！（多分…笑）

